

関西大学独逸文学会研究発表概要（第100回研究発表会）

著者	上月 富佐子, 梶川 裕子, 金子 哲太, 宇佐美 幸彦
雑誌名	独逸文學
巻	52
ページ	83-85
発行年	2008-03-19
URL	http://hdl.handle.net/10112/12927

関西大学独逸文学会研究発表概要

(第100回研究発表会)

1. ドイツ伝承話と落語との接点

— 「笑い」のモチーフから —

上月 富佐子

あらゆる文化圏に「笑い」のモチーフが見られるのは周知のところである。これまでも帰属文化による「笑い」の相違の考察は、比較文化論の一つとしてなされてきたが、本発表では更にこれをほり下げ、異なる文化間における「笑い」の類似モチーフの有無やその影響関係を、ドイツの伝承話と日本の落語を題材として、検証した。取り上げたドイツの伝承話は、『冗談とまじめ』、『テイル・オイレンシュピーゲル』、『ミュンヒハウゼンの愉快な冒険』、『グリム童話』の4作品である。

今回、ドイツの伝承話と日本の伝承話芸の「落語」とを、「笑い」のモチーフの視点から比較・検証を進めた結果、そこには多くの「笑い」の類似モチーフの存在が見られた。

またグリム童話 (KHM 44) 『名付け親の死神』 (Der Gevatter Tod) と落語『死神』とのモチーフ分析を行うことにより、落語『死神』がヨーロッパの「死神」モチーフと関連性のあることが検証できた。

国、時代を越えて語り継がれた「笑い」の類似モチーフの存在は、帰属文化による「笑い」の相違点だけではなく、共通性、更には人間の「生」に対する普遍性をも感じさせてくれる。また、日本の伝承話芸・芸能文化である「落語」のネタのルーツが、ドイツ伝承話に行き着くのは、文化事象としても興味深いものであった。

2. 『マルテの手記』前後におけるリルケの死生観の変容

梶川 裕子

主に、『時祷集』(1905)、『マルテの手記』(1910)、『ドゥイノの悲歌』(1923)に見られるリルケの死生観の変容を考察した。

『時祷集』からは、第三部「貧困と死の書」を取り上げた。ここで見られるリルケの死生観はそのまま『マルテの手記』にも見られる。リルケはこの両作品で、「固有の死」というものの大切さを強調している。大都市パリで人々の「固有の生き方」が見られなくなったように、「固有の死に方」もなくなりつつある。そういった「固有の死」と大量生産される死の対比を、例を取り上げながら考えた。

『ドゥイノの悲歌』からは、死に関する部分をそれぞれの悲歌から抜粋して考察した。この作品の最後には、「生と死」「上昇と下降」「喜びと苦悩」など、一見対立すると思われるものが、実は対立的協働の関係にあり、相互に支えあっているということが示されている。

3. 中高ドイツ語のhaben + 過去分詞の「意味」について

金子 哲太

ドイツ語のhaben + 過去分詞は、古高ドイツ語から中高ドイツ語期にかけて形態的、構造的には拡充化への道をたどったが、意味・用法的には一定方向の発展を遂げていたとはいえず、その体系的変遷を記述することは難しい。発表では、おもにコンテキストに現れる時間性、人称性、さらに話法性を手がかりに、中高ドイツ語期のhaben + 過去分詞について意味分析をおこなった。すでに „Der arme Heinrich“ を用いてなされた試論的考察を今回扱ったより規模の大きい作品 „Kudrun“ へとその調査対象を広めておこなうことで、その内容や方法論上の妥当性を問うというのが狙いであった。

当該文は現在性を含意するコンテキストで現れることがほとんどであることが示されたが、この点は当該文で使用される現在形habenが担う時間性（現在、未来、無時間）との適合性を表していると言えるのではないかと述べた。他方でコンテキストにおいて1/2人称表現が頻出すること、話法の助動詞や接続法等を用いた話法的表現が少ないことから、当該文には広義の話法性が表れているのではないかと指摘した。個々の例の意味分類や関連性等を浮き彫りにするまでには至らなかったが、ひとつの試みとしてHelbigらが分類しているModalwörterの意味領域との関連付けをおこない、付け加えてPaulの文法書における記述の部

分的修正の必要性についても言及した。

4. ベルリンにおける文学者たちの墓標と記念碑

宇佐美 幸彦

ベルリンの主要な墓地にはドロテーエンシュタット教区墓地（ブレヒト）、ハレ門前の墓地（シャミッソー、ホフマン）、ベルクマン通の総合墓地（テーク）、旧マタイ教会墓地（グリム兄弟）、フリードリヒスフェルデ中央墓地（コルヴィッツ）、ヘーアシュトラーク墓地（ホルツ、リンゲルナッツ）、ダーレム森林墓地（ベン、ミューザム）などがある。「永遠の眠り」の世界は不変かと思われるが、さまざまな理由から著名人たちの墓も大きな変化にさらされている。第一に個人の墓は特別な人物として指定されなければ、年数の経過で消滅してしまう。ゲオルク・ハイムは若くして亡くなり、ナチス時代に表現主義が評価されなかったため、その墓は消滅して存在しない。第二に都市計画などで墓地そのものが消滅した場合もある。ニコライの墓はルイーゼンシュタット墓地にあったが、現在は公園となっている。第三に戦争の空襲で破壊され、立て直されたアルノー・ホルツの墓のようなケースもある。第四に意図的に死者の尊厳を破壊した悪質なナチスの例もある。ナチスは旧ユダヤ人墓地やリープクネヒト、ルクセンブルクの革命記念碑（ミース・ファン・デア・ローデ作）を破壊した。記念碑の設置も大きく時代の変化を反映する。シラーの記念碑はナチス時代に国民劇場前から撤去され、ハイネの記念碑は当初の設置場所を変更されたが、東西ベルリン統一後、やっと本来の場所に置かれるようになった。